

卒論テーマ

これからの学校教育―「心の教育」を中心とする諸富祥彦氏の教育論の考察―

初等教育教員養成課程 社会選修（哲学専攻）

前田 敬亮

序章

現在、学校教育の現場にはさまざまな問題が存在する。例えば、いじめや不登校といった子どもたちの問題や、子どもとの関わり合いだけでなく保護者への対応に労力を割かれてしまうといった教師の問題である。また、さまざまな問題によって教師という職を長く続けることができないケースもしばしば耳にする。

これから教師になる身として、これらの学校教育における問題について考察していくことが、子どもたちにとってより良い未来を切り開いていくことに繋がっていくのではないかと考えた。

また、道徳が教科化されることについても着目し、道徳教育においてどのような能力を身につけさせていかなければならないのか、ということを中心にこれからの学校教育について考察していく。

そこで、それらを考察する際に長年スクールカウンセラーとして教師に寄り添い、学校教育の場に携わってこられた諸富祥彦氏に注目した。

第1章 諸富氏のフランクフル研究

第1章では、諸富氏の考え方の根幹にあるフランクフル心理学について論じている。

フランクフルは1905年、オーストラリアの首都ウィーンで生まれ育ったユダヤ人であり、ロゴセラピーや実存分析を確立した心理学者・精神科医である。

第二次世界大戦の際にはナチス軍によりアウシュヴィッツの強制収容所での生活を余儀なくされる。そこでの経験がフランクフルの論理には大きな影響を与えられているとされがちだが、実際にはそれ以前にすでにその論理はほぼ確立されていた。（もちろんアウシュヴィッツでの経験はその後のフランクフルの論理に影響は与えられてはいる。）そのため、一般的な領域にも落としこめるような論理になっていると諸富氏は述べている。フランクフルの論理、なかでもロゴセラピーを中心とするフランクフル心理学とは、一言で言えば「どんな時も人生から意味がなくなることは無い」という救いと、「自分には、今・ここでなさなければならないことがある」という要請の論理を自覚することで、「心のむなしさ」から解放しようというものである。

ここでいう「心のむなしさ」とは「ただなんとなくやる気が起きない」といったものである。また、フランクフル心理学において、この「心のむなしさ」は、現代の若者たちにとって大きな問題になっているという。「心のむなしさ」の背景には、日本の社会全体が豊かな社会を実現してしまったことがあるという。その結果、本気で努力して成し遂げていか

なければならないことが見えにくくなっているものである。この「心のむなしさ」の問題は、いじめをはじめとする学校現場のさまざまな問題にも影響を与えている。

そのためにもフランク心理学では、「創造価値」「体験価値」「態度価値」の三つの価値を見つけ出していくことが求められている。この三つの価値が生きる意欲の源泉となっていくのである。

第2章 諸富氏の道徳論

第2章では、いじめ問題と不登校問題を取り上げ、現代の子どもたちに足りていない、育んでいくべき能力について論じている。そしてそれらを育てていく場として道徳教育の充実が必要不可欠なのである。また、諸富氏はこの道徳教育を中心として、学校教育や家庭教育、社会教育など、すべての教育の場において行われていくべき教育のことを「心の教育」と表現している。

国立教育政策研究所が行った「いじめ追跡調査（2010 - 2012）」によると、2007年に小学4年生だった児童が2012年に中学3年生になるまでの6年間、計12回の調査で「1度もいじめの被害者になっていない」と答えた児童・生徒と「1度もいじめの加害者になっていない」と答えた児童・生徒がともに2割にも満たないという。この調査結果からは、被害者になったことのある子どもが加害者にもなったことがある、ということがわかる。いじめられたという非常につらい経験をしたにもかかわらず、自分以外がいじめられていればいじめる側として加わってしまうのである。このことから考えられるのは、いじめというものが恒常化しており、いじめが起きているという状態が、言わば「普通」の状態になってしまっているということである。また、自分がいじめられないようにするために、他の誰かをいじめてしまっているということも考えられるだろう。

ここで、この問いに対する答えを導くためにも、「なぜいじめは起こるのか」「いじめの原因は何なのか」ということの考察を行った。

平成27年の文部科学省による『不登校児童生徒への支援に関する中間報告』では、不登校児童生徒の数は平成25年度に6年ぶりに増加しており、常に高い水準で推移していることが指摘されている。もちろんこれらの問題に対して、国や地方自治体においても、さまざまな対策が採られてきているが、学校という教育の場において、どのような対策が必要であるか。そのために必要になる実践方法を具体的な例を挙げながら論じている。

育んでいく能力としては「心のむなしさ」を越える力と人間関係能力が挙げられる。前者は、つまり、頑張る意味を見出す力である。今の子どもたちは塾や習い事にと忙しく、親や教師から頑張れと言われ、必要以上に期待だけをかけられ続けている。このことが子どもたちにストレスを与え、追い込んでしまっているのである。また、それらも自分の将来に本当に役に立つのかもわからないままに、ただ落ちこぼれないための努力を強いられている場合が多い。こうして溜め込まれたストレスを発散するためにいじめによって他人を排除したり、自らが去ったり（不登校）してしまうのである。そのため、全力で取り組

むべき課題を自分自身で見つけ出し、それに向かって努力していくことが必要なのである。

具体的な手法には、ボランティア活動やキャリア教育の充実などが挙げられる。そういった活動を通し、「自分にもできることがある」「自分にはやらなければならないことがある」といった使命感を育んでいくのである。また、内観法を簡略化したものによって感謝の気持ちを持たせ、それを自分自身の生きる意欲にしていくことも有効である。

後者については、なかでも「他者受容・他者理解」の能力や「自己表現・自己主張」の能力、耐性や調整力を身に付けていかなければならない。それらの能力を育む手法としてディベート等が挙げられている。そのなかで「せめぎ合って、折れ合って、お互い様」という感覚を身につけていく必要があるのである。また、これらの能力は「無駄な時間」に育まれるものであるため、この「無駄な時間」を惜しまないことが重要である。

本論文の中では、いくつかの実践例を挙げているが、週ごとに入れ替えながら行っていくとより効果が得られるように思われる。第 1 週目は自己イメージの形成を、第 2 週目ではディベートを、第 3 週目では内観法に基づく実践を、第 4 週目は自由な時間を、といった具合である。

もちろん学級の状態や雰囲気によって、優先的に行うべきものは変わってくるだろうが、心の教育を進めていくうえでもっとも重要なことは、子どもたちが真剣に取り組むことだと考えられるため、毎週同じことを繰り返すよりもこのように違うものを組み合わせながら行えば、より効果が得られるのではないかと考えられる。

また、心の教育はその場その場の指導や、不適応児童・生徒への対応に留まるのではなく、継続的に、全ての児童・生徒に行っていかなければならない。さらに、心の教育を行うなかで、他者や社会とのかかわりを強く意識させていくことが必要になる。

第 3 章 諸富氏の学校・学級論、教師論

第 3 章では第 2 章で論じたものをよりよく実践していくためにはどのような学校教育や教師のあり方が必要になってくるのかについて論じている。

学校とは、勉強を学ぶ場であると共に、人間関係能力を学ぶ場でもある。そして、子どもたちはそれを教師や大人たちの人間関係からも、敏感に感じ学んでいくのである。そのため、学校は一部の授業や部活動などを保護者や地域の方々に開放してもよいのではないかと諸富氏は述べている。また、理想の学校には、学校のあらゆる問題に対して、一人の教師に責任を押しつけ任せるのではなく、その一人の教師を支えることを通してみんなで考え、責任もみんなで共有することができ、また、問題を一人で抱え込まず、すぐに相談することができる理想の教師集団が必要である。加えて、教師それぞれの個性を生かし、子どもたちの多様さに対応できることも重要である。

よい学級のあり方とは、クラスのすべての子どもたちが「ここは自分のいるべき場所なのだ」という感覚を持つことができることである。そのためにも、子どもたち全員に役割を与え、学級目標や学級のルールを自分たちに考えさせることが重要になる。これによっ

て、子どもたちのなかに「このクラスの主役は自分たちである」という思いが生まれ、上で述べたような感覚を掴むことができるだろう。

教師にはさまざまな資質が必要であるが、授業構成力と援助希求のしやすさ、人間関係のプロフェッショナルであることは、とくに重要なものだと考える。援助希求のしやすさとは、子どもたちが「この先生になら相談できるな」と思いやすいということである。また、教師という役をきっちりとこなしながら、友達的な側面を見せることのできることも重要である。

教師に求められる資質に共通することとして、「これから子どもたちに育んでいくべき能力である」を自身も有しているということがある。子どもを育てる立場にある教師は子どもにとって手本にならなくてはならないし、ましてや、自分が持っていない能力を子どもたちに教えることなど不可能に近いはずである。そのためこれからの教師に求められる資質とはつまり、これから子どもたちに育んでいかなければならない能力なのである。

終章

教師にとっての三つの価値領域について、「創造価値」とは、教室で待つ子どもたちであり、その子どもたちを成長させていくことである。「体験価値」とは、子どもたち自身が感動できるような体験が教師にとっての感動にもなるという共有体験である。「態度価値」とは、教師にとってのいわゆる「困った子」に対しても、「決して切らない、見捨てない」と粘り強くかわり続ける姿勢である。そして、それによって子どもたちに変化が見られていくこと。それこそが教師にとっての態度価値である。

まとめ

子どもたちは自分の身近にいるすべての大人から、さまざまな能力を身につけていく。そのような視点から見ても、教育とは、学校のなかだけで行われるものではなく、家庭や地域などすべてが連携し行われていかなければならないものであると感じた。

しかし、実際問題として学校が教育の中心であることは大きくは変わっていかないだろうし、そうあるべきである。そのため、学校はもっと外につながりを広げていくべきだと考える。学校側が保護者や地域に開けていくことで、地域全体で子どもを育てていくという意識は強くなっていくのではないだろうか。教師同士はもちろん、それ以外の大人たちが、子どもを育てるために協力していくことが必要である。そして、そのような姿を子どもたちに見せていくことが一番の教育になるのではないだろうか。